

## 序論 〈孫文革命〉研究の方法

孫文の指導の下で行なわれた中国国民党（及びその前身）の革命運動、即ち〈孫文革命〉に関しては、既に各分野で膨大な量の先行研究の蓄積が有り、恐らくは中国近代史の中でも最も研究の盛んな領域の1つであると思われる。無論、その論題・方法・解釈・評価等は極めて多様であるが、今日までの研究史を回顧すると、そこには以下に述べる様な2つの一般的な傾向が看取される<sup>1</sup>。

まず第1の傾向は、革命運動に参加した様々な個人に関する微視的な研究が多いことである。その中でも孫文の思想や行動を研究課題としたものが最も多いことは、言うまでもない。即ち、帝国主義・代議政体・土地国有化・産業開発から自然・宗教・教育・伝統・女性にまで及ぶ、様々な問題に対する孫文の見解の分析、あるいは李鴻章への上書やロンドンの清国公使館監禁事件から、最後の北上の際の日本訪問にまで至る孫文の動向の追跡や、更には所謂「滿蒙讓渡」や「日中盟約」といった政治的醜聞に関わる資料の探索等が、多くの研究者によって為されているのである<sup>2</sup>。また、一部に見られる孫文に対する一種の人身攻撃も、この範疇に含めることができるであろう<sup>3</sup>。

第2の傾向は、多くの研究が何等かの歴史観、あるいは特定の思想的立場に基く価値判断を下していることである。その最も代表的なものはマルクス主義、殊に毛沢東史観による評価で、孫文・中国国民党の革命運動は毛沢東・中国共産党のそれに先行する「ブルジョア革命」、即ち後者に至る過渡期の運動であるとされる<sup>4</sup>。また、近代西洋型民主主義に対する接近の程度が評価の基準とされる例も時として見られ、その場合には「独裁から民主へ」という政治発展を前提に、孫文・中国国民党が「どの程度に進歩的であったか」が検討課題となっているのである。

総じて言えば、何等かの理念が漸進的に実現されていく単線的発展過程として政治史を捉え、その上における位置を測定することによって、孫文を初めとする様々な個人の価値を判断するということが、これまで広く行なわれてきた。換言すれば、価値が次第に獲得されていく過程としての「歴史の進歩」を所与の前提として、各個人がそれに貢献し得た程度を評価することによって「人物批評」を行なうことが、従来の革命運動研究においてかなりの部分を占めてきたと思われるのである。

しかし、微視的な人物研究を通じて巨視的な革命運動全体の把握を行なうことには、やはり一定の限界が有ると考えられる。なぜなら、革命運動は決して孫文個人の行動には還元され得ず、ましてや単なる孫文思想の具現化ではないからである。また、特定の歴史観に基く評価は、往々にして時代の政治的・思想的状況の影響を被り、結果として認識客体が持つ歴史的特殊性を捨象し、認識主体の奉じる価値を超歴史的・普遍的なものとして適応する、言わば後付けの解釈・評価に陥る虞が有る。つまり、「人物批評」的な研究は、〈孫文革命〉の全体像を把握して中国近代史上に位置付け、その歴史的意味を客観的に考察するためには、必ずしも十分な方法ではないと思われるのである。

そこで、本論稿では革命運動を革命家個人の活動の結果としてよりも、むしろ支配-従属構造という国家-社会関係の変革を企図して、何等かの社会集団が政治化したことによ

って生じる国家体制の変更として捉える。そして、各個人をこの構造の様々な結節点として理解する。即ち、微視的であるよりは巨視的な手法である。故に、本論稿が研究対象とするのは革命家としての孫文個人ではなく、孫文の指導の下に行なわれた革命運動の全体としての〈孫文革命〉である。無論、孫文が一貫して革命運動（の一部）の指導者であり続けたことは事実であるが、革命運動は孫文一人によって遂行されたのではなく、様々な人物・集団・階層が運動に参加したことによってこそ、孫文もそのカリスマ的指導者となり得たと言うべきであろう。故に、孫文個人も構造に属する一つの結節点と捉えられる。そして、どの様な社会集団が、どの様な状況下で政治化することによって革命運動が発生し、それがどの様な広がりを持ち、そして国家体制をどの様に変更し、国家-社会関係のどの様な変容をもたらしたのかを考察するのである。

具体的には、1890年代から1920年代に至る〈孫文革命〉の主要な舞台となった、香港・澳門を含む広東省の地域社会に着目し、興中会から中国同盟会・国民党・中華革命党を経て中国国民党に至る革命団体が、どの様な集団・階層の参加によって構成された革命勢力であったのかを分析し、その運動を同時代の共時的・空間的な広がりの中に位置付けると共に、その通時的・時間的な変遷・展開を跡付けることによって、中国の支配-従属構造あるいは国家-社会関係が、〈孫文革命〉によってどの様に変更したのかを検討するのである。そして、この様にして得られた巨視的な政治史像を踏まえて、これを「地」としてその上に「柄」となる微視的な孫文個人の思想を位置付け、また逆により巨視的な「地」である国際環境を把握することによって、まさに〈孫文革命〉の全体像を描き出すことができるであろう。

尚、本論稿は特定の歴史観あるいは政治的・思想的立場に基いて、〈孫文革命〉に対する評価を下すことは行なわない。これは、緒言で述べた様に脱革命時代である現代における中国革命研究が、比較的容易にイデオロギーから自由であり得ることにもよるが、一義的には先に指摘した「歴史の後知恵」を避けるためである。故に、道義的・政治的価値の問題に対しては敢えて判断停止の態度を取り、可能な限りカント的な意味での「純粋な」認識態度、即ち没価値的な事実認識に徹することに努める<sup>5</sup>。

本論の各章の概要は、以下の通りである。

第1章「〈孫文革命〉の起源-興中会の成立と運動発生過程」では、最初の革命団体でありながら、今日でも依然としてその起源が完全には確定されていない興中会の成立を巡る諸資料を比較検討すると共に、社会の政治化による革命運動発生過程を辿ることによって、〈孫文革命〉の起源を検討する。

第2章「辛亥革命の中の〈孫文革命〉-その宣伝による動員」では、清朝を打倒して中華民国を樹立した辛亥革命において〈孫文革命〉が占める位置を測定するために、その動員を目的とした様々な宣伝活動を分析し、どの様な社会集団がどの様な意図に基いて革命運動に参加したのかを検討する。

第3章「民国初年の中国同盟会と国民党-広東省における政党組織と政治参加」では、辛亥革命後に議会政党となった中国同盟会と、その後身である国民党がどの様に地域社会への浸透を試み、また様々な社会集団が政党組織を通じてどの様に政治参加を行なったの

かを検討する。

第4章「討袁驅龍運動の展開－中華革命党の指導原則と動員形態」では、第二革命失敗後に結成された中華革命党が、華南における袁世凱政権の支柱である龍濟光の打倒を企図した討袁驅龍運動における、その指導原則の機能と動員活動の形態とを考察し、更に護国運動との関連を検討する。

第5章「南方政府の変遷－その構造と性格」では、北京政府に対抗する護法運動のために華南に樹立された一連の南方政府の、成立過程・組織機構・人員構成の分析を通じて、〈孫文革命〉が次第に国家政府を掌握して地域社会に対する支配を確立し、党国体制を形成していった過程を検討する。

第6章「中国国民党と地域社会－広東省における基層組織の拡大」では、1920年代に南方政府の統治領域において中国国民党がその基層組織を構築していった過程、特に「聯ソ・容共」政策に基く「改組」の経緯を分析し、党国体制の基礎となった地域社会における勢力基盤を検討する。

以上の様に、1890年代から1920年代に至る〈孫文革命〉により、中国国民党が形成されて広東省に党国体制を確立した過程を検討した上で、この過程と深い関わりを持つ革命哲学・外国勢力の考察を補論として付加する。

補論1「孫文の革命哲学－動員と指導の理念としての『孫文学説』」では、以上の様な〈孫文革命〉の展開過程において、孫文が自らの革命哲学を集大成して「知るは易く行なうは難し」と説いた『孫文学説』の思想内容と、その革命運動の形態や党国体制の成立との関係を考察する。

補論2「〈孫文革命〉と外国勢力－孫文の対外宣伝」では、〈孫文革命〉の展開過程を4つの時期に分ち、その各々における孫文の対外宣伝の言説の分析を通じて、列強による包囲という状況に孫文がどの様に対処し、またそれが中国の国際環境にどの様な影響を及ぼしたのかを検討する。

そして結論では、本論において明らかにした〈孫文革命〉の全体像を前提として、党国体制の成立による中国の国家－社会関係の転換を検討する。